

初年次共通科目のシラバスにおける記述内容の特徴

—学習目標と評価方法・基準に着目して—

Characteristic of Syllabus Description in First-Year Common Course

—Focusing on Learning Goal, Evaluation Method and Standard—

小林 雄志, 中嶋 康二

Yuji KOBAYASHI, Koji NAKAJIMA

熊本大学大学院 社会文化科学研究科 教授システム学専攻

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

Email: yuji-k@kumamoto-u.ac.jp

あらまし：本研究では、日本の大学で行われている授業のシラバス上の記述における学習目標と評価方法・基準に関する現状を把握することを目的とした。日本全国における総合型の国立大学のうち、初年次共通科目のシラバス検索システムをウェブ上で公開している 48 大学を対象として、基礎英語、情報処理、スポーツ実技の 3 科目のシラバスの抽出を行い、①学習目標、②評価方法・基準、③目標と評価の一致に関する記述内容の調査を実施した。その結果、「基礎英語は他の 2 科目に比べ、学習目標に『養う・養成する』といった述語動詞が多く用いられている」等のそれぞれの科目における記述内容の特徴が明らかとなった。

キーワード：授業設計、学習目標の明確化、インストラクショナルデザイン、初年次教育、FD・プレ FD

1. はじめに

シラバスは、学生が履修する授業を選択する際や教員相互の授業内容の調整に利用される⁽¹⁾のと同時に、授業設計の際の「設計図」としても用いられ、FD・プレ FD 研修においても授業の質向上のためにシラバス作成・改善の実習が行われている。インストラクショナルデザインに基づく授業設計においては、その「出口」である学習目標を明確化し、評価方法・基準を定めることが重要であると考えられるが、本研究では日本の大学で行われている授業のシラバス上の記述における学習目標と評価方法・基準に関する現状を把握し、大学における授業改善のための示唆を得ることを目的として、初年次共通科目のシラバスについて、①学習目標、②評価方法・基準、③目標と評価の一致に関する記述内容の調査を行うこととした。

2. 方法

日本全国における総合型の国立大学のうち、初年次共通科目のシラバス検索システムをウェブ上で公開している 48 大学を対象として、通常は大学内において学部間の共通科目として開講され、異なる大学間でも比較的共通の内容を扱っていると考えられる初年次共通科目の基礎英語、情報処理、スポーツ実技の 3 科目に関するシラバスの抽出を行った。なお、これらの科目は、同一の科目名であっても複数の担当教員によってさまざまな曜日・時限で開講されている場合が多いが、大学内において統一された内容のシラバスが存在している場合はその統一シラバスを抽出の対象とし、統一されていない場合は各大学各科目 1 つのシラバスを無作為に抽出するものとした。

2.1 調査対象科目について

基礎英語については、初年次に行う必修の英語であり、いわゆる「英語 I」や「基礎英語」、「総合英語」といった名称のものを対象とした。

情報処理については、科目名が「情報処理」や「情報基礎」といったもので、PC の操作や基本的なアプリケーションの使用法、電子メールやウェブ検索等の基本的スキルを身に着ける実習を含むものを対象とした。

スポーツ実技については通常、「スポーツ実習」等の名称で開講されているが基本的には担当教員ごとに担当する競技種目が異なるため、本研究においては、比較的どの大学においても実施されているバドミントンを対象競技とすることとし、バドミントンが開講されていない場合は競技特性がバドミントンと近い卓球もしくはテニスを対象競技とした。また、競技が特定されていない場合（複数の種目をオムニバス形式で実施する場合）等については、バドミントンを含むものを基本として抽出を行った。

2.2 調査項目について

①学習目標、②評価方法・基準については学習目標を明確にするための 3 要素(目標行動・評価条件・合格基準)⁽²⁾に照らし合わせ、以下の通り調査を行った。

①学習目標については、「目標行動」すなわち行動として目標が示されているかという観点から、学習目標や到達目標として記載されている項目を対象に、記述されている文章における述語動詞の傾向を科目ごとに調査した。②評価方法・基準については、「評価条件」および「合格基準」に関する内容がシラバスの評価方法や評価基準の欄に明確に記載されていた。

るか(「評価方法が記載されているか」,「各評価方法の配点が記載されているか」)の調査を行った。また,③目標と評価の一致についてはシラバス上で読み取れる範囲で,①と②の対応に関する調査を行った。

3. 結果

調査結果の概要について,①学習目標②評価方法・基準に関しては表 1 にまとめた。

3.1 学習目標について

基礎英語については,特に「〇〇を養う」,「〇〇を養成する」や「〇〇力を身につける」という記述が多く認められた。また,英語学習が中学・高校での学習内容を踏まえていることから「伸ばす」,「高める」,「向上させる」といった表現がしばしば用いられていた。

情報処理に関しては,具体的に「〇〇の操作ができる」,「〇〇を作成できる」といった目標行動として記述されている場合が多い一方で,そのような記述以外では,知識や操作方法を「理解する」というものも少なからず存在した。

スポーツ実技においては,分野の特性上「〇〇の技能を獲得する」,「習得する」,「身につける」といった表現が多数を占めた。また,ルールなどの知識を「理解する」といった記述もしばしば認められた。

3.2 評価方法・基準について

「評価条件」について,基礎英語では定期試験や小テスト,情報処理では課題やレポート,スポーツ実技では授業態度や出席を評価方法として採用しているものが多かった。

「合格基準」に関しては,試験やレポートの配点に関する具体的な記載が多くシラバスにおいて認められ,一部の大学ではウェブ上でルーブリックを公開していた。しかしながら,配点などを示さず「〇〇から総合的に判断する」としているものも少なからず見受けられた。

3.3 目標と評価の一致について

基礎英語に関して,語彙や文章の読解力に対する評価はほとんどの場合,小テストや定期試験によって実施されていると判断できた。しかしながら,会話や表現に関する能力に関しては,「授業での活動」や「参加状況」などで評価を行うとしているものが多く,「口頭発表」や「スピーチ」など具体的な評価方法を記載しているシラバスはわずかであった。

情報処理に関しては,「〇〇ができる」という目標を,課題やレポートによって実際に何かを作成させることで評価している場合が多く認められた。また,一部のシラバスではタイピングなどの実技試験を課しているものも認められた。

スポーツ実技においては,ある技能ができるようになることが目標の場合,実技試験の実施が明記されているシラバスがある一方で,どのように評価するのかシラバス上からは読み取れないものが多数存在した。

表 1 科目別シラバスの記述内容の特徴

	基礎英語	情報処理科目	スポーツ実技
学習目標の述語動詞	理解する 養う 養成する 身につける 向上を図る 〇〇ができる 学ぶ	理解する 習得する 作成できる 操作ができる 活用できる 説明できる 学ぶ	理解する 習得する 身につける 実践する 養う 〇〇ができる
評価方法	定期試験 小テスト 出席 授業への参加 口頭発表 課題 レポート	課題 レポート 出席 プレゼン 定期試験 小テスト	出席 授業態度 技術試験 レポート 授業への協力 授業への取組
評価基準	・評価方法ごとに配点を明記 ・総合的に判断 ・自己評価		

4. おわりに

本研究における調査により,科目ごとに記述内容の特徴が明確となった。学習目標については,どの科目についても「養う」や「理解する」といった表現が認められたが,それをどうやって評価するかが困難であることから,やはりできるだけ「目標行動」として設定する必要があるだろう。また,評価に関しても,具体的な配点などの評価基準を示しているものが多い一方で,そうした基準を示さず「総合的に判断する」といった表現をしているものについては用いる評価方法ごとに「合格基準」を示す必要がある。また,特にスポーツ実技においては出席点を認めている傾向が強いが,授業態度の評価基準や具体的な運動技能の評価方法(実技試験や授業内での試合時の技術評価方法)等,出席の中身を評価する基準・方法を開発するなどの対策が必要であると考えられる。

謝辞

本研究は「特別経費(プロジェクト分)大学の特性を生かした多様な学術研究機能採択プロジェクト(7714S012628,代表:鈴木克明)」の助成を受けて実施された。

参考文献

- (1) 中央教育審議会:「用語集」,新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け,主体的に考える力を育成する大学へ～(答申),pp37.(2012)
- (2) 鈴木克明:「第3章 教材の責任範囲を明らかにする」,教材設計マニュアル,北大路書房,pp23-38.(2002)